

病人、子ども、老人と共に一週間がかりでようやく着いたときには、何人もの人が死亡し、他の生存者は乞食同様だった。ただただ故郷に帰れる喜びと気力で頑張っただけだった。残念なのは、開拓団の自分の家で凍死したり、匪賊に殺されたり、栄養失調のため死亡したり、病死した方々にわれわれが生きて帰れたことを申しわけなく思っている。

心から御冥福を祈ってやまないものである。

満州の建設と召集と

東京都 原 豊 重

昭和十八年三月、ジャムス四一二部隊の軍命令で大林組は北満チブリ・ポツリ飛行場建設にあたり、私は転勤する。ポツリより自動車で三時間もかかる山奥です。団山という部落です。工事は飛行機の格納庫をつくるのです。満人の報国隊を遣う。十九年正月、報国隊に配給品を受取りに行く途中、自動車のエンジンが凍る。吹雪で

見とおしがつかず、部落に宿泊することにして、翌日部落より品物を受取り持ち帰る。満人の宿舎をまわり、配給品を事務所まで取りにこいと呼びかける。満人服と酒、豚肉を配給する。われら日本人には樽酒が配給され、内地を思い出しました。あとで樽を見たら、酒がこおりつき、残りの樽に一升ほど残っており、酒が凍る寒さなのです。現場では、鉄筋不足で輸送がとまり、北満は工事中止です。

昭和二十年七月、すでに戦争は激しくなっていた。関東軍命令で、大林組は南満に引揚げろとのこと。家族は鞍山、私は錦州に行けとの電報を受けて、家族と奉天の駅で別れる。私の荷物は錦州大林組出張所に送る。錦州に着くと、鞍山に戻れとの電報があり、すぐ列車に乗り、鞍山に着く。現場は、立山。家族いっしょに現場に乗りこむ。友だちの加藤君に召集令状がきたので、引きつき終わった後、私にも令状がきた。北満依蘭の兵事課に出頭せよとの令状である。

家族の見送りを受け、出発する。列車に乗り、ハルビン駅に着き、埠頭にきて見ると船が修理中で直りしだい

出港すると書いてある。まだ時間があるので、市内見物する。夕方二度埠頭に来て見れば、七時三十分ジャムス行きが出港すると揭示され、船員に遅れた証明書をもらう。乗船が終り、ドラがなる。淋しくなる。船が動き出す。隣にいた人はジャムス行き。私は依蘭に行くのです。私は満洲事変にも参加したと話をする。今度の戦争は大変だねと語りあう。酒を取り出し、一杯どうぞと差し出す。とつぜん泣き出し、尋ねると結婚二か月ですと言う。私は子供二人あり男女です。今度は生きて帰ることはできないと思う。そのとき船は依蘭に着き、元気でがんばれと別れ、船を降りて兵事課に行くと、君の部隊は出発したので通化省に行けと言われた。

貨車が昼すぎ出る、それに便乗して通化、仙人の丘の高射砲兵隊に行く。私は野砲で、高射砲は一度も訓練をうけたことがないので、毎日見学中に迎えにきた笹原伍長といっしょに、通化城内のそばを流れる、川岸に行く。石を積み上げ、ほし草をつみ、毛布を敷き、テントを張り、部隊人員は二十人でした。歩哨に立つ、銃は十丁で、剣銃は竹のさやです。毎日昼は山道を行軍する。庭

内警備する。十二日に関東軍司令部、通化に移転してきた。警備が嚴重になる。八月十五日朝、点呼時、本日正午に重大ニュースがあると言う。私は警備交代で飛行場へ行き、その時終戦命令が出た。連らくを受けて部隊長が一言話をした。現地召集は、自分の職場に今直ぐ帰れ。汽車は後出ない、食糧は三日分携帯せよ、途中どんなことがあるかわからん、と言う。皆と別れ、元気で帰れよと送られ、駅にきてみる。

輿地よりの引揚げ者、女子どもで満員、乗車は無理。機関車に乗りこみ、梅江までくる。そのとき、列車は奉天にはいることができない。ソ連軍が侵入してきているので、撫順で降りる。そして、撫順の市役所へ行き、通化より引揚げてきた話をする。職員に案内され法昭寺という寺に案内され、寺には北満牡丹江、勃利の引揚げ者で一杯。牡丹江でソ連軍が侵入してきて日本の兵隊さんが早く逃げろと呼びかけたので、子どもは兵隊さんといっしょに自動車に乗り、子どもと別れた。子どもは今どこにどうしているかと思うと泣けますという。逃げるとき、自分の家に火をつけてきたという話しをしてくれ

る。朝、昼、夜に尋ね人ニュースがありラジオのまわりに集まり、耳を傾けた。

私達は、皆さんの食事運搬、また配給品を受け取りに行く。滞在して四日目、列車が出ると通知があり、すぐ出発する。鞍山に着き、社宅を尋ねる。入口に立ち、扉をのぞきお父さんだと言う。

責任者として引率、引揚げ

東京都 曾根 正

昭和二十年八月九日、ソ連軍が侵攻してきたときは、東満州勃利県公署に役付きで勤務していたが、八月十日召集を受け、午前九時の列車で牡丹江に向かった。

午後三時頃、北公園に集結し、点呼を始めたところ、ソ連機が数機牡丹江駅と牡丹江の鉄橋を爆撃した。婦女子、一千五百人が樺林から徒歩で牡丹江に向かっていく。彼らを安全地帯まで引率せよとの命令を受け、私はその責任者を命ぜられた。牡丹江の駅に入り、ホームま

で収容し、同夜貨車でハルビンへ出発した。

八月十五日をハルビン駅、八月十七日早朝新京駅についた。私は全員を室町小学校に連れて行き、ここを収容所とした。淑徳女学校に、ソ連軍の若い隊長の率いる新聞印刷隊が入ってきた。私はロシア語を習得していたので、隊長と仲良くなり、田内（現豊橋在住）が近々ソ連軍により銃殺されるとの連絡を受け、かの隊長に頼み、田内君を救出した。

室町小学校には四回ソ連兵の訪問を受けたが、三回は私が話をして引き取って貰ったが、一回は酔っており、拳銃を振りまわして処置なしなので、隊長にきて貰って追いはらった。

九月初め、先輩から安東にいる家族をつれ戻ってくれと頼まれた。避難民を預かっているからと言って断ったが、安東に発った。

安東についた翌日から列車は運行停止、新京に帰れたのは十一月の末。室町小学校に行ったところ一人もいなかった。越冬のため、市内に分散してしまった。

昭和二十一年一月十九日、東広場にあるソ連軍第一憲